

【論文】

## 無頭の共和国

——1930年代、コンコルド広場のジョルジュ・バタイユ——

泉谷安規

本稿では、1934年2月6日にパリのコンコルド広場で起きた右翼の暴動を中心として、ファシズムに対抗するジョルジュ・バタイユ(1897-1962)の一連の政治的テキストを検討する。これらのテキストはバタイユが関わってきた雑誌に発表されたものが主であるが、それらを年代順に読んでいくと、バタイユの政治的立場の変遷をたどることができるのはもちろんであるが、それ以上に興味深い点は、バタイユの反ファシスト的政治思想と行動が、敵であるファシズムのそれに類似したものにみえてくるという奇妙な現象が観察できることである。もちろんこのことは、バタイユがファシズムに染まっていくということではなく(のちに見るように、ドリユ・ラ・ロシェルやブラジヤックのようにファシストないしは対独協力者になるということではない)、ファシズムの本質と病巣を摘出していけばいくほど、それらがバタイユ自身の思想のテーマや立場と必然的に交錯し重なっていくということである。

したがって、本稿では、そうしたバタイユのファシズム研究と政治・思想的営為の軌跡がバタイユ的な特殊なものであるのか、あるいは時代が共通して抱えていた政治・思想的問題に属するものでもあるのかをも同時に問うことになる。

### 1. 1934年2月6日の騒擾事件

1934年2月6日の夕刻、パリのコンコルド広場で暴動が発生する<sup>1)</sup>。この暴動に参加したのは、全国退役兵士連合(UNC)、右翼リーグのアクション・フランセーズ(Action française)、火の十字架団(La Croix de Feu)、愛国青年団(Jeunesses patriotes)など、そして若干のコミュニストであった。議会調査委員会の公式発表では、死者15名、負傷者1,500名弱。ことの発端は、与党の急進社会党の大臣や議員もからんだ金融汚職事件、いわゆるスタヴィスキー事件、そして右翼シンパであった警視総監キアップ(Chiappe)の解任に対するダラディエ内閣への抗議表明のデモ集会であった。デモそのものは、規模や参加者数において、他のデモに比べて特殊なものではなかったが、その後のフランス社会に与えた影響は測り知れなかった。2月6日以後もいくつかのデモやストライキが連鎖的に続き、人々はこの事件をナチズムやファシズムのフランスへの浸透現象と受け止め<sup>2)</sup>、それに歯止めをかけることのできない政府の無力はもちろんのこと、議会民主主義に対する深甚な疑念が蔓延していくのである。

文学者もまた例外ではない。ドリュ・ラ・ロシエルやブラジャックなどは、この夜の騒擾事件を機縁として後の対独協力を決意している。一方、左翼の作家たちや思想家たちもこの事件を自分たちの思想や信条を揺るがす衝撃として、あるいは共和国フランスの危機として敏感に反応している。

結局のところ、この2月6日に起きた一夕のコンコルド広場の暴動は、フランスの体制を根幹から揺るがす出発点となっただけではなく、第二次世界大戦の導火線となり、第三共和政を崩壊に導く結果となった。まずは、その影響の大きさと深さを測るために、本題に入る前に、アトランダムではあるが、非常に興味深いいくつかの徴候的事例を見ていくことにしよう。

### 1-1. アルチュセールの悪夢

ルイ・アルチュセール (Louis ARTHUSER, 1918-1990) といえば『資本論を読む (*Lire le Capital*)』と『マルクスのために (*Pour Marx*)』その他の著作を書き、「認識論的切断」で現代思想に大きな影響を与えた哲学者であると同時に、錯乱状態で同伴者の妻を殺害し世界中の思想界に衝撃を与えたことで有名な人物でもある。

驚かされるのは、その筋金入りのマルキストのアルチュセールが2月6日事件に関して並々ならぬ関心、というよりむしろ共感を抱いていたことである。第二次大戦で捕虜になったさいに記した「捕虜日記」の手帳の1941年2月7日の日付には、次のような夢の記録が読まれる。

「二月六日」に居合わせた夢を見た。裸の死体の山、遠ざかる飛行機、機銃掃射。ついで静寂。ほくの前には林が広がり、木々のあいだに、年老いた色白の女たちのグループと一人の女がいる。ほくは彼女を見つめ、動揺している。<sup>3)</sup>

夢の内容は、第二次世界大戦の戦闘体験と女性たちとの関係が主であるにもかかわらず、アルチュセールは、冒頭で唐突に、この夢は「『二月六日』に居合わせた夢」であると断言する。2月6日事件当時、アルチュセールはまだマルセイユにいたから、この暴動事件の場に居合わせるはずもなく（ただし、この事件はフランス全土に波及し、地方でも大なり小なりの暴動やデモが起きている）、明らかにこの断言には根拠がない。ただし、伝記的研究によれば<sup>4)</sup>、その後リヨンに移ってリセの生徒となったアルチュセールは、当時のリヨンの政治的雰囲気とリセの教師の影響により、右翼思想をもった少年であったということだから、その記憶が混じっているに違いない。それにしても、後年の60年代の著名なマルキスト思想家とのイメージの齟齬には驚かされる。30年代当時は、若きアルチュセールさえもが王党派やアクション・フランセーズにかぶれるような、フランス全体が混沌とした状況がはびこっていたのだろう。

そもそも、ここでアルチュセールが夢と事件を結びつけているのは、夢を見た日付の偶然の一致だけであろう。それにもかかわらず、あるいはそれだからこそ、このような夢が数年の時を超えて、もう一つの個人的危機（捕虜の身という）において、この夜に出現してきたことには驚きを禁じえ

ない。この事件が長年アルチュセールの内部にとどまり続けていたこと、若きアルチュセールに衝撃と熱狂を残した、その強烈さと執拗さをこの夢は表しており、そこには深く大きなものが確実にあったことが推察されるのである。

#### 1-2. シャトー街の集会：「続く／後に続け (A Suivre)」vs「観念論者たちの厄介者どもが多すぎる」

1929年2月12日に、一通の質問状が送付される。宛先は、革命的知識人と作家、すなわち（現役あるいは元の）シュルレアリストたち、『クラルテ (Clarté)』誌、『哲学 (Philosophies)』誌、『大いなる賭 (Le Grand Jeu)』誌、そしてそれ以外の関係者、総勢73名である。こうした質問状を配布して、送り返された回答を公表し、それをもとに議論や論争を展開していく手法は、当時のシュルレアリスムがしばしば用いた挑発的手法で、よく知られているものには「あなたはなぜ書くのか？」や「自殺はひとつの解決となりうるか？」といったものがある。

ここで、これまであまり注目されることのなかったこのシャトー街の集会を取り上げるのは、シュルレアリスム運動史において、創設以来、グループとしての活動が最初の危機を迎えたという点（それまで、メンバーの個人的な反目と除名はあったが）、そしてそこには後にフランスの文学界や思想界で中心的役割を果たす人物たちが関係していた点にある。このシャトー街での集会をうまく乗り換えられるかどうかにはシュルレアリスム運動のその後の継続の如何がかかっていたのである。そして、これから見ていくように、この集会もまた2月6日事件に無関係ではないのである<sup>5)</sup>。

それゆえ、1929年2月12日に送付されたアンケート内容には、かなり意図的で誘導的な畏がかけられていた。まず、質問状は、現在の危機的状況において、貴殿の活動は〈個人的〉な形態にとどまると考えますか、という主質問があり、次いで二択の副質問に分かれ、a)「然り」と考えるならその理由と定義を述べてください、b)「否」と考えるなら、どのような「共同的活動」を「誰と一緒に」行いたいと考えますか、という内容であった。ブルトンらシュルレアリストたちが当初から期待した答えは後者にあり、敵と味方の区別をつけて、味方となりうる人員を増員して、シュルレアリスムの共同的活動を再活性化させようという狙いがあった。それが期待されていたのが『大いなる賭』のグループだったのである。

さて、アンケート送付者のなかからさらに人選を絞った57名へ、3月11日にパリのシャトー街のバーで開かれる集会への招聘状が送られた。集会の議題は「レオン・トロツキーの最近の追放についての批判的検討」。このときトロツキーはスターリンに追放されて海外逃亡していたために、トロツキーを擁護する議論が予定されていたのである。だが、この集会は、以下の経緯からこの議題に全く触れられることなく、当初の予定から大きく逸れていく。ちなみにこの時、質問状を送付して回答をまとめる役割を一手に担ったのが、シュルレアリスムに参加したばかりのレーモン・クノー (Raymond QUENEAU, 1903-1976) であった。クノーは、のちにバタイユと交友を結ぶが、この時は事務的な裏方の作業に徹して目立たない存在であったという。

シュルレアリストと『大いなる賭』のメンバーを主とする32名の参加者が参集したなか、集会は

20時半に、まず、送り返された回答を読み上げることから始まった。特に否定的な回答意見が披露されたのだが、その送り主は、以下の四名である。バタイユ、ミシェル・レリス (Michel LEIRIS, 1901–1990)、アンドレ・マソン (André MASSON, 1896–1987)、ポール・ギタール。なかでもバタイユの回答がもっとも激しいものであり、次のような文句がつづられていた。「観念論者たちの厄介者どもが多すぎる (Beaucoup trop d'emmerdeurs idéalistes)」。

かくして、この集会は、公式に表明されていたトロツキーに関する議題を素通りして、もう一つの隠された裏の狙いである『大いなる賭』への攻撃に終始することになる。当初、シュルレアリスム・グループと協力関係を期待されていたこのグループが、この夕べ、逆に攻撃の対象とされた理由は二つあった。その一つが「高等師範学校」の生徒たちの八十三名たちの発案になる、兵役に関する「高等軍事教練」に反対する声明の計画である。さまざまないきさつからこの署名者から脱落者が出て、最終的に十名が残り、さらに過激な反対声明の署名文書が書かれた。その文書は公表を予定されていて、『大いなる賭』のジルベール＝ルコント (Roger GILBERT-LECOMTE, 1907–1943) に預けられていたのだが、学校からの退学勧告などの圧力もあり、文書は未公表のまま生徒たちに返却された<sup>6)</sup>。シュルレアリストたちはこれを学校やメディア権力からの圧力への屈伏と解し、ジルベール＝ルコントを弱腰の保守反動思想の持主と詰ることになる。もう一つの話は、当初の動機は些細なものと思われていたが、予想以上に大きな反響と反感を呼び起こすこととなる大衆雑誌へ掲載された記事であった。その記事の書き手は『大いなる賭』のメンバーの一人であるロジェ・ヴァイヤン (Roger VAILLAND, 1907–1965) で、雑誌『パリ・ミディ』(1928年9月5日) に書いた論説で、警視總監のキアップを称賛するものであった。そのことがシュルレアリスム側から暴露され、会は混乱に陥る。このシュルレアリスム側から仕掛けられた罠に憤慨して会場を退出した者もいるなか、ブルトンをはじめとするシュルレアリストたちの集中攻撃にさらされた『大いなる賭』のメンバーたちは狼狽し、ヴァイヤンは反省を強いられ、撤回の書状を書かされる。こうして、ルネ・ドマール (René DAUMAL, 1908–1944)、ロジェ・ジルベール＝ルコント、ロラン・ド・ルネヴィル (Roland de RENÉVILLE, 1903–1962)、ジョゼフ・シマ (Joseph SIMA, 1891–1971) といった、後年、それぞれの活動で高名となるランス出身の若き芸術家たちは、シュルレアリスムとの「共同的活動」の結束を強めるどころか、喧嘩別れになる。つまり、シャトー街の集会の当初の目的、新たな賛同者を迎え入れて停滞していたシュルレアリスムの共同的活動の活性化を図る目的は完全に失敗に終わり、あまつさえ手ごわい新たな敵を作ることになる。このシャトー街の集会は、ブルトンとアラゴンによって書かれた報告書のタイトル「続く/後に続け」が表しているように、シュルレアリスム側の強引な駆け引きによって、当初の目的とは正反対の結末に終わったのである。

ところで、『大いなる賭』のメンバーの出身地ランスの同郷人にロジェ・カイヨワ (Roger CAILLOIS, 1913–1978) がおり、カイヨワもまた一時はシュルレアリスム・グループに参加したのだが、ささいなことから (びよんびよん豆の解明) ブルトンと論争となり、シュルレアリスムの手ごわい批判者となっていく。

いずれにせよ、こうして、このシャトー街の集会の騒動において、アンドレ・マソン、レーモン・クノー、ミシェル・レリス、ロジェ・カイヨワとバタイユを取り囲む役者たちが一堂に会した感がある。クノーは雑誌『社会批評』でバタイユと活動を共にし、マソンは有名な「アセファル」のデッサンを描き、レリスとカイヨワはバタイユとともに「社会学研究会 (Le Collège de sociologie)」の中心的メンバーとなる。

### 1-3. コラボ作家の誕生：ドリユ・ラ・ロシエルとブラジャックの事例

続いて、2月6日の事件をきっかけに、直接的あるいは間接的に、ファシストになった作家、あるいは第二次世界大戦にドイツに協力する対独協力者＝コラボになった作家を取り上げる。

まずは、対独協力者の代表格ともいべきドリユ・ラ・ロシエルを見てみよう<sup>7)</sup>。

ドリユ・ラ・ロシエル (Pierre DRIEU la ROCHELLE, 1893-1945) がフランスの第三共和政や30年代の国際情勢に疑問を抱き、独自の政治的ビジョンを模索・展開しつつ、それを小説やエッセーに書き記し、最終的に対独協力を選択し、戦後自殺するに至った経緯は有名である。ドリユ・ラ・ロシエルの政治思想の模索の軌跡、それを一冊の著作と読むことができるものとしては、自伝的小説『ジル (Gilles)』(1939)を置いて他にはないだろう。しかも、ドリユ・ラ・ロシエルの分身ともいえる主人公ジルが対独協力者になる決意をしたのが、ジルが2月6日のコンコルド広場の事件に遭遇する小説のクライマックス部分である。有名な場面であるが、ここで見てみよう。

ジルがコンコルド広場のほうにもどっていかうとしているとき、とつぜん不穏なざわめきがあり、燃える息が彼の顔にかかった。新聞社にいるあいだずっとからっぽと思っていたこの広場から、別の群衆が逆流してきたのだ。(中略)

《やつらは発砲しているぞ》彼らは強烈な信頼感を込めてジルを証人とみなして叫んだ。いくつもの手が荒々しくジルの手をにぎりしめた。いくつもの目が情熱にかられた要求をもってジルに問いただしていた。《いっしょに行こう》ジルの若さが戻ってきてこの若さに合体した。(中略) ついにフランスは、全ヨーロッパで、世界中で胎動しつつある力の重さを受けとりつつあった。<sup>8)</sup>

ここでは、コンコルド広場に集まった人々の群集心理が忠実に描かれているのではないだろうか。見知らぬ者たちが集まり、見えない力によって一致団結する。すなわち、ここには暴動における熱狂のお祭り騒ぎ、人々の一体感、そして長年ドリユ・ラ・ロシエルのコンプレックスであった「若さ」の蘇りがある。と同時に、戦後の不況や政治腐敗で停滞していたフランスやヨーロッパが「若さ」と「力」を取り戻して(ここでは、それがファシズムであろう)、再生していくのだという希望が暗示されている。したがって、ジル＝ドリユ・ラ・ロシエルもこの瞬間に変貌を遂げるのである。後悔する間もなく、後戻りのできないくらいに。

一瞬のあいだにジルは人が変わってしまった。左右を眺めまわしながら、戦争を司っている恐れと勇気という、迷いからさめた神聖な夫婦に自分たちがかこまれているのを見て取った。(下線強調引用者)<sup>9)</sup>

この決断の結果、ドリュ・ラ・ロシエルは、第二次大戦の終結後の1945年3月16日、幾度かの自殺未遂を企てた末、拳銃で自殺することになる。

一方、ロベール・ブラジャック (Robert BRASILLACH, 1909–1945) も、『われらの戦前 (*Notre avant-guerre*)』(1939–1940)において、ドリュ・ラ・ロシエルの作品『ジル』を念頭におきながら、この夜のことを書いている。

ひとびとのあいだにあった政治的意見の対立などは消滅してしまっていた。コミュニストとナショナリストが手をたずさえて進もうとしていた。翌七日朝の共産党機関紙「ユマニテ」は、党員に対して退役軍人全国連合との連携をよびかけていた。この日に流された血のなかから大いなる希望、国民革命 (*la Révolution nationale*) の希望が生まれようとしていた。かつて老クレマンソーは「コンコルド広場でブルジョワたちの血が流されないかぎり」フランスの国民革命は成就しないだろうと予言していたものだ。そして、この悲劇的な夜、共和国大統領が辞任したとか、数百人の死者がでたとかいった様々な情報が飛びかい、ひとびとの心が陶醉感と怒りと不安のあいだを揺れ動いたこの夜に国民革命の気運が醸成されたのだった。(中略)ドリュ・ラ・ロシエルは、この日の蜂起から「勇気 (*le Courage*)」と「恐れ (*la Peur*)」というすばらしいカップルが生まれたと書いた。ドリュは、この夜のもつ意味をはっきりと理解していたのだ。そうだ、「勇気」と「恐れ」が手に手をとってパリの街を駆け抜けていったのだ。<sup>10)</sup>

回想録であるためか、このブラジャックの文章はドリュの小説よりも描写は具体的で、騒擾を描いているながら客観的な判断を忘れていない。ブラジャックによれば、この夜の喧騒は、「コミュニストとナショナリストが手をたずさえて」、左右のイデオロギーや政治的対立意見が消滅したのちに「国民革命」が胎動しかけた夜であり、政敵であるクレマンソーの言葉を引いて、「コンコルド広場でブルジョワたちの血が流されない限り」この革命は誕生しないのだとしている。ブラジャックは、この日の蜂起から「勇気」と「恐れ」のカップルが生まれたのであると書いているが、この表現は文中にあるように、ドリュ・ラ・ロシエルの『ジル』から引いたものである。ドリュもブラジャックもともにこの夕べの事件に、自分たち個人の転換期と同時に時代の転換期を見て、それらを重ねていることで共通している<sup>11)</sup>。そして、二人とも、フランス革命がそうであったように、新たな時代の到来には、混乱と恐怖、そして犠牲がともなうことは避けられない、むしろそれらは必要であると考えていることである。

わたしたちにとって、二月六日の蜂起は永遠にその輝きを失うことはなかった。毎年わたしたちは、二十二名の死を悼むため、コンコルド広場の噴水にスマイレの花束を供える。あの噴水は彼らの墓標だ。しか

し、花束をもって集まる者の数は毎年すくなくなっている。フランスの愛国者はもともと忘れっぽいのだ。革命家だけが神話 (mythes) と儀式 (cérémonies) を理解できるのだ。(……) それは「犠牲 (sacrifice)」の夜だった。(……) 事件のあと、右翼と左翼の政治家たちは、あの燃えさかる炎と純粋であった二十二名の死者たちを政治的に利用した。しかし、それがなんだというのだろう。あの夜のことを歴史から抹殺することなどだれにもできはしない。(下線強調引用者)<sup>12)</sup>

ブラジヤックは、この2月6日のコンコルド広場の騒擾をこう総括している。注目すべきは、ここで、革命家たちだけが「神話」と「儀式」の意味を理解することができたとされていることである。そこには「死者たち」の「犠牲」も欠けてはいない。ここでは「革命」はもちろん、新しい国家の〈創造〉であり、そしてまた、その起源には「神話」と「儀式」と「犠牲」が必要であることを、ブラジヤックはこの事件のなかに鋭く見抜いている。このことは、ナチスが政権樹立の成立のさいに、プロパガンダに力を入れたことを想起させる。その意味において、このブラジヤックの一節は、革命や暴動といった騒擾の持つ群衆や民衆を恐怖させ熱中させ一体化する凝集力はもちろんのこと、国家の起源にある「神話」、「演劇性」や「スペクタクル性」の祭祀的性格を描いた重要な一節であるだろう。

以上、この2月6日の事件に関連する出来事をいくつか見てきたが、この事件は予想以上の影響と痕跡をフランスに残したことになる。この意味において、この事件は、エマニュエル・ベルル (Emmanuel BERL, 1892–1976) の著作のタイトルにもあるように、「第三共和政の終焉 (La Fin de la Troisième République)」<sup>13)</sup> の始まりといっても過言ではないであろう。

では、次に、バタイユのテキストを見ていくことにしよう。

## 2. 『社会批評』から『アセファル』まで：ファシズムとの闘い

### 2-1. 「ファシズムの心理構造 (La Structure psychologique du fascisme)」、 「フランスのファシズム (le fascisme en France) 」

前者の論文の初出は『社会批評 (*La Critique sociale*)』誌の第10号–11号、1933年11月および1934年3月に発表されたものなので、1934年2月6日の暴動に直接触発されて書かれたテキストではないが、ファシズムに関するまとまった理論的テキストとして読むことができる点では重要である<sup>14)</sup>。対して、後者は、未完のまま放棄された論考「フランスのファシズム」のために書かれた原稿の一部である。本文中に「私は一九三四年に『フランスのファシズム』に関するこの本を書いている」(OCII, p. 206) というバタイユ自身の記述があることから、バタイユは「ファシズムの心理構造」を含むさらに規模の大きい、ファシズム研究の書物を構想していたことがわかる。この「フランスのファシズム」というごく短いテキストは残されたその一部であること、そしてこれが2月6日の暴動に直接触発されて書かれたものであろうと考えられる。ファシズムとは何かを明らかにする目的で書かれたこれら二つの理論的テキストは、バタイユが本格的にファシズム研究に着手し

ていた証拠といえよう。

論考「ファシズムの心理構造」の特徴は、二つあると思われる<sup>15)</sup>。まず、マルクスの上部構造と下部構造に準拠し、そこに「同質性 (homogénéité) / 異質性 (hétérogénéité)」という概念装置を導入して、「社会構造の全体性 (ensemble de la structure sociale)」(OCI, p. 339) を規定すること、そしてそこからファシズムの形態と構造を定義しようとする試みであるということである。

「同質性」と「異質性」という二つの概念についてであるが、前者は「通約可能性 (commensurabilité)」(OCI, p. 340) を持っていること、というよりも「有用である (utile)」(OCI, p. 340) ということが最大の特徴である。「同質性」は、人間や物質といった諸対象を比較・検討したり、その自己同一性を確定するための基礎である。そして、それをもっとも活用するのが「科学」や「技術」の役割である。しかしながら、「同質性」と「異質性」という二つの概念は対概念や相補的な概念ではなく、本質的に異なった、極度に非対称的な概念である。「同質性」は「異質的なもの」をそれと把握理解する(通約する)ことができずに、「異質的なもの」をあたかもそれが存在しないかのように、排除し隠蔽していくしかない<sup>16)</sup>。そのことがもっとも顕著に表れる例として、経済上の「生産」(OCI, p. 340) がある。生産、流通、消費、再生産の経済的サイクルがうまく機能して社会や国家を維持していくためには、数字(金銭)による等価性を利用して、ある要素を別の要素へ交換・変換していくこの「同質性」が欠かせない。そして、近・現代社会においては、その経済システムの中心的担い手は、中層階級に属する資本家やブルジョワジーである。このシステム内における、労働者たるプロレタリア階級は、バタイユが指摘するように、二重の位置関係を持っている。すなわち、労働の担い手として生産に携わるといふ点においては、同質な存在であるが、利益を享受するといふ点においては経済システムから排除される異質な存在と見なされる。

したがって、資本主義国家においては、政治的あるいは経済的に安定した状態が保たれるのが理想的状態であり、そうした状態であれば、同質性のみが機能して、異質的なものは表面に現れてこないはずである。とするなら、ここでバタイユが「ファシズムの心理構造」という論考を書いて、「異質性」という概念を問題にしていること自体、その背景にはフランスの政治・経済システムが機能不全に陥り、国民の不満が高まっているという危機的な状況下に置かれているということを示していることになる。その一つの表れが、もちろん2月6日の暴動事件であることは言うまでもない。そして、その根本的要因は、いうまでもなく、革命を目指す階級闘争の高まりであり、もう一方はファシズムの台頭である。バタイユは、ファシズムの形態と構造を明確にするために、この「異質的なもの」という概念を導入して、政治学、経済学、社会学、宗教学、精神分析学といったあらゆる側面から総合的に分析し把握しようとする。それがこの「ファシズムの心理構造」というファシズム研究なのである<sup>17)</sup>。

さて、第二の点、ファシズムの形態と構造のテーマの検討に入ることにしよう。バタイユははっきりと、ファシズムを他の「同質的」国家とは異なる「異質な存在」とであると定義づけている。



(……) ファシズムの指導者たちは、間違いなく、異質的な存在に属している。デモクラシー制における政治家たちは、さまざまな国で、同質的な社会に固有な平板さを代表しているが、彼らとは反対に、ムッソリーニあるいはヒトラーは、全く別であるものとして、直截に突出した姿で現れる。変化の政治上での担い手としての彼らの現在の姿が、どのような感情を掻き立てるとしても、彼らの人々、諸政党、そして法の上にさえ位置せしめるような力が作用していることに気づかないわけにはいかない。それは、ものごとの規則正しい流れを、そして平和だが退屈な、また自分だけではやっていくことができない同質性を断ち切る力である。(合法性が断ち切られるという事実こそ、ファシスト的な行動の持つ超越的で異質的な性格のもっとも明らかな徴である) (OCI, p. 348. 傍点強調はバタイユ)

ファシズムが当初〈非合法〉な集団であることは当然として、本来的に避けられ抑圧されている「異質的な存在」が、どのようにして、人々の支持や勢力を得て、他を圧して権力を獲得していくのか、これが誰しも最初に抱く疑問であろう。

バタイユは書いている。

ファシズムの行動は、それ自体は異質的であるけれども、優越的な形態の集合に属する。その行動は、伝統的に気高くそして高貴なというふうに定義されてきた感情に呼びかけ、権威を有用性に基づくすべての判断の上に置かれる無条件の原理として打ち立てようとする。(OCI, p. 350. 傍点強調はバタイユ)

ここにあるように、ファシズムは、「高貴な (noble)」、「気高い (élevé)」といった「優越的な (supérieure)」長所を自らに強引に付与していくことによって、有用な価値と「権威 (autorité)」を獲得していくという。ただしこの操作は、しかるべき根拠がなく、上から独断的に与えられものである。これをバタイユは、「強権的な至高性 (la souveraineté impérative)」と呼んでいる (OCI, p. 351)<sup>18)</sup>。この強権的権威を持った人物は、下位の位置にあるものに命令し支配することができる。バタイユがわかりやすい例としてあげているのは「父親が子供たちに対する立場、軍の指導者が軍隊と市民集団に対する立場、主人が奴隷に対する立場、王が臣下たちに対する立場」そして「いくつかの神話的な立場」(OCI, p. 351) である。ムッソリーニやヒトラーといった〈指導者〉は、政治宣伝その他の操作によって、この「強権的至高性/主権」という「権威」を手に入れたのである。

では、〈指導者〉と党あるいは国家に属する人々との結びつきは、どのようなものであるのか。

外部に現れた行動についてではなく、その源について考えるならば、指導者というものが持つ力は、催眠状態の中で作用する力に似ている。指導者をその信奉者たちに結びつけている情動の流れ (flux affectif) —それは信奉者たちから彼らが従う指導者へと向かう (反対方向にも作用する) 心的な同一化というかたちを取る—は、いっそう暴力的で、いっそう過度な権力とエネルギーを共同で意識することと相関する。

(OCI, p. 348. 傍点強調はバタイユ)

指導者ないしは統率者と信奉者たちを結びつける絆をあらわすのに「情動 (affect)」という言葉が使われているが、もちろんこれはフロイト的な意味における用語であり、双方向的な信頼関係の結びつきであり、かなり強い心的韌帯である。これに加えて、「統率者の強権的な人格は、沸騰状態 (effervescence) の持つ根本的に革命的な様相を自分のほうに吸い寄せつつ否定することができる」(OCI, p. 362)。ファシズムやナチズムが持つ、ある種利害を超えた不合理な団結力の強さはここにありだろう。ここで使われている「沸騰状態」は、おそらくデュルケムの「集合的沸騰」から借用された表現である。『宗教生活の基本形態』においてデュルケムが論じているように、オーストラリアの先住民たちは、自分たちが「集合する」ことによって生じる宗教的力が、その集合から生じていることを認識できない。彼らはその力を自分たちの外部にあるトーテム記号やトーテム動物に投影し、その力を「聖なるもの」あるいは「神」と見なす。こうして、社会的シンボルは「聖なるもの」となる<sup>19)</sup>。これと同じことが、ファシズムの指導者と信奉者のあいだに起こっているのだろう。ちなみに、これらのテキストでは、指導者を意味する言葉として「頭領 (chef)」や「統領 (Duce)」あるいは「総統 (Führer)」という言葉が何度も使われている。こうして、ファシズムの指導者は信奉者たちにとっては「神」にも等しい絶対的な存在となるのである。この盲目的な信頼と依存、そして民衆たちの持つ勢力を巧みに操作することによって、信奉者たちあるいは国民は、最高存在の指導者へ最終的に「主権」を移譲していく。独裁的なファシズム国家のはじまりである。

通常の家国同様に、ファシズム国家にも〈軍隊的権力〉と〈宗教的権力〉の二つの機能がある。ただし、バタイユは「集権化 (concentration)」(OCI, p. 356) という言葉を使って、ファシズムにおいては、本来別々の権力である軍队的側面と宗教的権力を強固に結びつけ、歴史的見地においてそれぞれが持っていた機能を再活性化し、「軍事的にして宗教的な権威を再度統合して、全体に及ぶ抑圧を実現する」(OCI, p. 357) と述べている。軍隊については、上で見たように、隊長と兵士の関係は「情動」の強固な絆で結ばれており、兵士が軍の規律に忠実であり手柄をあげるなら、その出身階級がどのようなものであれ (下層階級出身であれ)、先ほど指導者において見たのと同じような性質の変換操作、すなわち劣等であった存在を上昇させる操作によって、兵士に対しても「優越さ」が保証され、その価値と階級はあがっていく。ファシズム体制において優勢を占めるのが軍队的様相であるのは事実であるが、「指導者の宗教的価値は、実際には、ファシズムの根本的な (……) 価値となっていて、それが民兵たちの活動に、兵士一般が持つのととは違った固有の情動的な声調を与えている。指導者は、指導者である限りは、実際に、原理——神聖な力の価値にまで高められて栄光に満ちる祖国の存在そのもの——の発現にほかならない (この価値は、ほかに考えるなどの考察にも優先し、そこに参入する者たちに情熱のみならず恍惚も求める)」(OCI, p. 363)。このように、ファシズムの宗教は、先に見たように「集合的沸騰」のうちに、指導者を神格化し、同時に国民国家においては総力戦では兵士以外の国民をも民兵として戦いに参与させるという軍事的機能も果た

すのである。要するに、ファシズムの「集権化」は、軍事的かつ宗教的権力の集中化・統一であり、「階級の統合」(OCI, p. 363)、国民の全体化を図る。ファシズムの全体主義的側面である。

ところで、これからが重要な点なのであるが、従来の王政と異なるファシズムの持つこのうえない脅威は、以下の点にあるとバタイユは見ているようである。

ファシズムは、貧困層との間に緊密な結びつきを持ち、そのために、ファシズムの形成は、古典的な王政的社会と深く区別される。なぜなら、後者は、至高の力域が劣等的な階級から多かれ少なかれ切り離され、接触を失くしているという性格をもつからである。しかし、ファシズム的な統合 (réunion) が実現され、既成の王政的統合 (非常に高いところから社会を支配するという形態の) に対立するとき、前者の統合は、単に出自をさまざまにする諸権力の統合、階級の象徴的な統合であるばかりでない。それはさらに、異質的な要素が同質的な要素と統合すること、厳密な意味での至高性 (souveraineté) が国家と統合することでもある。(OCI, p. 364)

本来、ファシズム国家は異質的なものからなる国家であるため、その非合理的で暴力的な性格ゆえに人々にとって危険な存在であったのだが、それが同質的なものと「統合し」変貌を遂げていく。このことは、ファシズム国家が単にその様相を変えていくということにとどまらず、既成の王政とは異なり、本来、そこに属するはずのない構成員も取り込んで行く——下層階級、大衆、労働者、プロレタリア等々——、というより、そうした構成員がみずからこのファシズム国家を支持し、そこへ入り込んでいくということである。こうして、ファシズム国家は、異質的であると同時に同質的なハイブリッドな国家となり、そこではあらゆる階級の国民の支持を獲得していく。逆説的な言い方であるが、ファシズム国家は、その当初の性格を脱ぎ捨てて、〈あいまい〉で〈両義性〉な組織になればなるほど、確実にその勢力と支配を拡大していくのである。その時、バタイユが書いているように、「厳密な意味での至高性」が指導者のファシズム国家と統合して、最終的に合法化されていく (1933年に選挙によってヒトラーが合法的に指導者の位置を獲得したように)。

この「ファシズムの心理構造」という論考において、上で見たのと同じような問題、もっとも難しい難題を投げかけている場所がある。それがこの論考の最終部分で述べられていることである。ファシズムもまた現体制の政治に対抗しそれを「転覆 (subvertir)」していく「革命」運動の一つの形態であるとしたら、そのファシズム革命とバタイユが希求する革命との違いはどこにあるのか。

沸騰状態の出現がこのように二重であり得るということから、前例のない状況が生じている。一つの同じ社会の中に、競合しつつ、同じ時期に、互いに敵対し合いかつ既成の秩序に敵対する二つの革命が形成されるのが見えてくる。同質的な社会が広く崩壊するのを共通の因子として、同じ時期に、対立する二つの分派が発展する。そして、そのことによって、二つのあいだに数々の結合と、時には深い共謀関係すらあることが説明される。(OCI, p. 370. 傍点強調はバタイユ)

一つはもちろんファシズムによる「革命」(疑似革命)であるが、もう一つは Kommunismus による革命を指している。「ファシズムの心理構造」では Kommunismus についてはほとんど言及されていないが、バタイユは Kommunismus をファシズムを抑える対抗勢力として考えてはいなかったようである(この論考が共産党から除名されたスヴァーリンの雑誌に発表されていたことも影響しているかもしれない)。最後に「人間の生の解放を追求し続ける深々とした転覆の動き」(OCI, p. 371)を希求するという抽象的な言葉でこの論考は締めくくられているが、バタイユにとって、「革命」なるものの明確なビジョンがあったとは思えない。「ファシズムの心理構造」においては、同質的な社会において「異質性」が沸騰し噴出することが「革命」と呼ばれていた。この「革命」をめぐる不明瞭さが、次の「コントロール・アタック」において混乱を起こす火種となっていく。

ところで、この時点でのバタイユによるファシズムは、「フランスのファシズム」のテキストにこう定義されている<sup>20)</sup>。

組織された権力として、ファシズムは、主権 (souveraineté) が軍隊化された政党に所属する(法的にはなくとも実質的に) 政体であり、さらにこの政党は、この主権をその指導者に終生委託する。

ファシズム政党はあらゆる社会階級出身の分子を、唯一の指導者の強権的な指揮の下に集合させる。この指揮は、党の各構成員が非合理的な牽引作用の支配力の下でこの指導者に自己を同化させるような、確固とした情動上の関係があることを推測させる。この指導者は、党のみならず、社会、民族全体を体現し、その存在は、神のごとくに、ほかのすべての人々の存在の上方に位置する。

(中略)

したがって、ファシズム的な型の社会においては、個人は、人格的な主権をどれも放棄して、神なる指導者がその頭部となっている身体の一部であるにすぎない。(OCII, pp. 206-207)

「主権/至高性 (souveraineté)」が軍隊化した国家、指導者と構成員が情動的(牽引的な) 靱帯で結ばれ、指導者が神にも比せられる単頭(寡頭)的な支配体制、ファシズム国家の脅威を説明して、何一つとして欠けることのない定義であるだろう。

## 2-2. コントロール・アタック (Contre-Attaque): 「超一ファシズム」の試み(?)

この名称のもとに書かれた一連のテキスト、手帖、パンフレット、ビラは、1934年2月6日の騒擾事件を契機として、長年の宿敵であったアンドレ・ブルトンらシュルレアリストと共闘するために作った「革命的知識人同盟 (Union de lutte des intellectuels révolutionnaires)」の産物である<sup>21)</sup>。この名称からわかるように、このグループは、反ファシズムはもちろんのこと、それ以上にフランス第三共和政が体現していた資本主義体制を転覆しようとする「革命」を前面に打ち出した集団である。

「ファシズムの心理構造」がファシズム理論の構築であったのとは異なり、「コントロール・アタック」は反ファシズム闘争を呼びかけるアピールが主眼であるので、その内容はかなり乱暴で露骨である。

1935年10月7日にパンフレットの形で刊行された「決意表明」と題された趣意書のいくつかの命題には、次のようなものがある。

5° 人民戦線について言えば、その指導者たちがブルジョワ的な制度の枠の中で権力を取ることはあり得るだろうが、そのプログラムは必ずや失敗する、と現在私たちは言明する。人民の政府を、また公安委員会 (salut publique) の指導力を確立するためには、武装した人民の假借ない独裁を必要とする。(OCI, p. 380. 傍点強調は原文)

「コントロール・アタック」は左翼内閣の人民戦線も否定している。そして、「人民の政府」あるいは「公安委員会」とあるように、この戦闘集団は、どうやらフランス革命の革命家たちを範にしているようである。それもフランス革命のなかでもっとも過激で、独裁的な「恐怖政治」で知られる革命家たちのジャコバン派である。

6° 権力を奪取するのは、かたちの定まらない蜂起ではない。今日社会の運命を決定するもの、それは、さまざまな力を糾合する巨大な組織、規律正しく、熱狂的で、時が至れば容赦ない権威をふるうことができる組織の有機的な創出である。力をこのように組織することで、頭脳も眼も持たない資本主義社会が深淵に——すなわち破滅と戦争に——向かおうとするその流れを受け容れない人々を、結集させなければならない。この組織は、自分は執事と奴隷どもに引き回されるために作られてはいないと感じている人々、人間の持つ直接的な暴力性に合致して生きることを求める人々、そして、集団に帰属するはずの物質的な富と精神的な昂揚——それなくしては生が本当の自由に戻されることはない——が滑り落ちて行くのを臆病に放置することを拒否する人々すべてに呼びかける。

資本主義のすべての奴隷どもに死を！ (OCI, p. 380. 傍点強調は原文)

「執事と奴隷ども」という部分に「ラ・ロック、ラヴァル、ド・ヴァンデルといった類の輩どもである」(OCI, p. 380) という注がバタイユによって付されていることからわかるように、「コントロール・アタック」の敵と目されているのが資本主義体制とファシズムの二つであることがはっきりとわかる。なおこのなかで、2月6日の暴動に参加した右翼団体「火の十字架団」のリーダーであるラ・ロック大佐の名前があるが、火の十字架団も含め騒擾事件に参加した右翼リーグがすべてファシストであったかどうかは大いに疑問視されている（現代の研究者は、むしろ、これらの団体は、右翼ないしは極右団体であるかもしれないが、ファシズムとは別物であるとみている<sup>22)</sup>。だがいずれにせよ、この段階では、「コントロール・アタック」のメンバーたちにとっては、「火の十字架団」はファシストの代名詞的存在として、第一の攻撃の対象となっていたことは確かである。

労働者と農民を自分たちの大義として戦うメンバーたちは、反ファシズム闘争そして革命を実現するためには、暴力に訴えることも辞さないと断言する。そうした類の文書のなかで興味深い

は、「裏切られた労働者の共同体」という表現がみられることである。タイトルは「労働者諸君、君たちは裏切られたのだ！」。

私たちは、ドイツ・ナショナリズムの幼児性痴呆ともなんの共通点 (rien de commun) も持たないし、フランス・ナショナリズムの老人性痴呆ともなんの共通点 (rien de commun) も持っていない。

(……)

私たちは、私たちが何がしかの国家に縛り付けようとする形式的な絆など、ものともしない。私たちは、今日、ヒトラーによってと同様にサローによって、ラ・ロックによってと同様にトレーズによって裏切られた人間の共同体 (la communauté) に帰属している。(OCI, pp. 400-401. 傍点強調は原文)

「共同体」は、この後の「アセファル」で中心的テーマとなり、後年、ジャン＝リュック・ナンシーやブランショが取り上げて論じている極めてバタイユ的なテーマであるが、ここでの用法は（上記の「ファシズムの心理構造」においても使用が認められたが）、そのごく初期的な段階のものであろう<sup>23)</sup>。

さらには、「コントロール・アタック」のビラの中には、「《二〇〇家族》」と題された次のようなものがある<sup>24)</sup>。

「コントロール・アタック

一七九三年一月二日——一九三六年一月二日

ルイー六世の処刑の記念日」(OCI, p. 394)

この文章で注目すべきところは、このビラが、切り取った牛の首を料理皿に盛ったイラストに書かれていることである。皿の上の牛の首、ルイ16世の名前、1793年1月21日の王の処刑の日付といい、ここでもまた革命が1789年のフランス革命と二重写しで見られていることがわかる。

しかしながら、フランス革命の主役たちと異なり、ここに集まった革命に熱狂する若者たちの「共同体」が立脚するのは、フランスという「祖国 (patrie)」ではなく「大地 (la Terre)」(OCI, p. 389) であることが明言されている。だが、やがて、ブルトンとのさまざまな意見の違いや署名手続きのちぐはぐさによって、グループ内に亀裂が走るようになる。とりわけ、以下のような親ファシズム的な発言によって、バタイユは「超ファシズム (Sur-fascisme)」であるとして、ブルトン陣営から難詰される。

「決意表明」のなかにこういう命題がある。

13° 私たちが確認したところでは、ほかのいくつかの国々で、ナショナリストたちの反動勢力は、労働者の世界が作り出した政府的武器を、自分たちに有利となるよう利用した。だから、私たちは今度は私た

ちがファシズムの作り出した武器を使用する番であると主張する。ファシズムは、人間に根底的な、情念の高揚と熱狂へ向かう渴望を利用する術を心得ていた。(OCI, p. 382)

ファシズムが見つけた武器を自分たちが利用するというのは、かなり安易で幼稚なアイデアで、本末転倒であり、場合によっては、逆にファシズムに飲み込まれていく危険性があるだろう<sup>25)</sup>。しかも、そこには味方と敵を分かちはっきりした境界線がなく、バタイユが「ファシズムの心理構造」の末尾で提起して、宙づりのままに残された問題の反響がこだましている。

何はともあれ、私たちはヒトラーの反外交的粗暴さをより好む。なぜならそのほうが、実際は外交官や政治家どもの涎を誘うような甘言よりも平和だからだ(OCI, p. 398. 傍点強調原文)

この煽情的なビラには、バタイユはもちろんブルトンの署名もあるが、実質的に執筆したのは、ジャン・ドートリー (Jean DAUTRY) で、しかも事前の打ち合わせも何もなかったようだ。このヒトラーを賛美するとも読める内容にブルトンらシュルレアリスト陣営は激怒する。この頃になると、メンバー間の相互了解もなく、訴える内容も個人の独断でとめどもなく暴走していつているような感がある。もともとが、反ファシズムと革命を標榜するだけの知識人たちの寄せ集めからなる「コントロール・アタック」という団体であったので、グループがてんでばらばらの「異質的な」集団になっていくのは当然なのかもしれない。

しかも、メンバーの一部からは、偽ファシズム的な言動が聞こえたりして、厄介極まりない。

ともあれ、こうして、この過激な革命志向のグループは、短命のまま瓦解崩壊したのであった。

### 2-3. アセファル (1936-1939) : 無頭人

コントロール・アタックで直接的な政治行動に失敗したバタイユは、今度は「アセファル」という共同体を中心に活動するようになる。ただしこの名前を冠した共同体は二つあり、一つはこれから見ていく雑誌であり、もう一つは秘密結社としていまだに多くが謎に包まれた宗教的共同体である。それゆえ、一般的には、政治活動において失敗したバタイユは政治の世界から身を引き、宗教的な方向へその活動を移動したというような解釈がなされることがある。しかしながら、雑誌『アセファル』(第四号まで出版される)を読むと、バタイユの政治的アンガージュマンはここでも依然として健在であり<sup>26)</sup>、宗教的なものと政治的なものがないまぜとなった活動であった。

そのことは、雑誌の第一号に高らかに表明されている。第一号の冒頭のテキストは「聖なる陰謀 (La conjuration sacrée)」というタイトルで、以下のような断言が読まれる。

見れば殲滅する必要を感じないではいられないような人間たちを相手にして、限界まで戦う前に場所を譲ろうとする者がいるだろうか。しかし政治的活動を超えたむこうに何も見出すことができないのだとし

たら、人間の渴望は、空虚にしか出会わないということになる。

われわれは凶暴なまでに宗教的である。(……)

われわれが企てるのは、戦争である。(OCI, p. 443. 強調はバタイユ)

加えて、雑誌『アセファル』といえば、雑誌同様に有名なアンドレ・マソンのデッサンがある。頭部を切断され、性器の部分に骸骨をつけ、右手に炎碧を挙げる心臓を、左手に剣をもった怪物である。

『アセファル』でのバタイユによる反ファシズムの闘争はニーチェと深く結びついている。第一号では、妹エリザベートによってナチス・ドイツに売り渡されたニーチェ哲学をナチスから奪取し、ニーチェの反ユダヤ主義という汚名をそそぐことに力点が置かれている。

第二号は「ニーチェの名誉回復」というタイトルがつけられ、巻の中央に、バタイユによって書かれた14の命題が掲載されている。この命題集はそれぞれナンバーが付されていて、二つの部分に分かれる。1から5までが「ファシズムについての諸命題」、そして6から14のまでが「神の死についての諸命題」と題されている(雑誌のナンバーは、14が抜けていて誤って15となっているが)。

その「ファシズムについての諸命題」の第1は次のような命題である。

1 「宇宙のもっとも完全な組織を〈神〉と呼んでもいい。」\*

既存の諸要素から出発して社会を再構成するファシズムは、組織のもっとも閉鎖的な形態であり、つまりは永遠の〈神〉にもっとも近い人間的存在である。

\* 『力への意志』、第七一二節 (*Œuvres complètes*, Leipzig, 1908, t.XVI, p. 170) (OCI, p. 467)

注がついているように、最初のカッコ内の言葉はニーチェの『力への意志』からの引用である。この冒頭の文章のあとに「革命」についての言及があり、こうある。「社会の革命においては(ただし現在のスターリニズムにおいては違う)、逆に解体がその極限点に達する。」(OCI, p. 468) つまり、〈神〉に比肩できるほど完全なものであれ、「組織体」は解体を免れることはできない、という主張である(バタイユここで生物学的な用語で語っているように思われる)。だが、続く文章にあるように、解体された「組織体」としての社会構造ないしは生物存在は解体されようとも、何度も自らを「再組織化」しようとする。そして、再組織化されたその存在は、「ファシズムにつづく場合でも、否定的革命につづく場合でも」、解体や分解の作用に反発する。ここでニーチェが引き合いに出される。

ニーチェ的な高揚の魅力 (*charme*)——この語の毒のこもった意味合いで——は、それが生を分解する、生を力への意志と皮肉との頂点に至らせながら分解する、ということに由来する。(OCI, p. 468)



ここでニーチェの「力への意志」(ととりあえず、ここでは呼んでおく)は、だから、社会ないしは生物を組織し権威を構築する力ではなく、それらを「分解」する「力」へと変換されているのである。

したがって、この第一の命題は、後半部分の「神の死の諸命題」の第6の命題へと続くようになっている。

6 「無頭人(アセファル)」とは神話的に、破壊をつかさどる至高性を、神の死をあらわし、そしてこの点で、頭部を欠いた人間に同一化することは、それ全体が「神の死」である超人的なるものに同一化することになり、結びつき融合する。(OCI, p. 470. 強調はバタイユ)

ここにニーチェ的主題である「超人」と「神の死」が現れるが、それらはなんらかの現象や実体をあらわすものではなく、社会ないし人間が分解、解体、破壊する、いわば〈生成〉する「力」としてとらえられている。そして「神の死」あるいは「超人」のあとに来るのが頭の無い存在、「無頭人」であるが、それは人間や社会構造の態をなしていない非—存在的存在ということになる。このことは何を意味するのであろうか? 「力」によってファシズムが破壊されたとしても、そのあとに来るのが、なんらかの社会や人間存在であるとしても(バタイユはここで「共同体」という例を持ち出している)、それらは、破壊や解体の「力」を免れないから、常に自らを構築する要素や組織を欠いた、不完全な欠如的存在となる、頭の無い怪物である「無頭人」のように<sup>27)</sup>。

### 3. 革命を決定づけるための装置ギロチン(?)

ここまで、雑誌ごとのバタイユの政治的テキストを見てきた。それをまとめると以下のようになるであろう。

まず、「ファシズムの心理構造」で詳細に考察がなされていたように、ナチズムやファシズムに対抗するには、ナチズムやファシズムが持つ「異質性」の強力な潜在力をこちらにも保持し、それを武器にして戦わなければならない。これは理論的には有効であるように見えるが、しかしそれでは、敵であるナチズムやファシズムとの区別がつかなくなる可能性を排除できない。「コントロール・アタック」で、バタイユが「超—ファシスト」呼ばわりされた理由の一端はこの点にある。

では、他の方法はないのか? 「異質的なもの」のうち最悪の部分を削除・破壊することである。だがそれでは、バタイユが重要視していた、無限のエネルギーと力を持つ人間の本質的部分を放棄するという矛盾を犯すことになる<sup>28)</sup>。ただ、バタイユは一時期、ナチズムやファシズム国家や政党の指導者=頭部、すなわち「首領(Duce)」や「総統(Führer)」を切り落とすこと、すなわちギロチンにかける「供儀(sacrifice)」を本気で解決方法として考えていたふしがある。それが「頭」のない人間=組織、アセファルの「無頭人」が表す図像学的意味ではなかっただろうか。また、上で見た「コントロール・アタック」では、労働者に集会を呼びかける日時は、わざわざルイ16世の斬首の記念日に指定されていた。この日付の符合が意味しているのは、周知のように、ルイ16世が1793年に

革命広場、すなわち現在のコンコルド広場でギロチンにかけられて処刑された歴史的事実をバタイユが意識していたことを示している<sup>29)</sup>。「コントロール・アタック」のピラの一つで、集会の日をルイ16世の斬首刑の日に定め、皿の上に牛の首を乗せたイラストを描いていたことがそのことを如実に語っている。なぜなら、フランス革命を起こした革命家たちにとっては、この王殺しの「供儀」が新しい体制すなわち共和国を成立にするために必要な儀式だったからである。バタイユもまた、そのことをパリのファシストたちに思い起こさせようとしたのではないのか？つまり、ギロチンの斬首によって、ファシズムを打倒し新たな「革命」を招来する試みである。また、それはバタイユにとって、1934年2月6日、一晚といえども、彼らファシスト（右翼リーグ）に占拠されたコンコルド広場を奪取することを意味していたと思われる。さらにそれは、異質なものと労働者やニーチェをファシズムから奪還する試みでもあった。まさに、二重三重の意味でのコンコルド広場「奪取」である。政治的理論と実践の矛盾を露呈しつつもバタイユがこのように、愚挙ともいえる過激な思想と行動にうってでたのは、それがバタイユにとって最優先課題であったからに他ならない。しかしながら、現在、そのコンコルド広場には今でも、権力の象徴のような記念碑オベリスクが威圧的に建っている。

とするなら、次の二つの問題を考えていかなければならない。

一つは、このギロチンによる斬首ないしは「供儀」のファンタズムは、バタイユ個人だけに帰する固定観念にすぎないのかという問題。もう一つは、それは個人の域を超えた人間存在に共通する、政治的・社会的・宗教的意味をもっているのかどうかという問題である。

まずは前者に関して言うなら、この処刑というファンタズムは、バタイユにおいて、ごく初期の時期から宿痾のように彼の内部に巣くっていた個人的なものであるという事実は否めない。1925年、執拗な妄想に悩まされ苦しんでいたバタイユが精神分析を受けた医者アドリアン・ボレルから譲り受けた凄惨な処刑（「百刻みの刑」）が写されている衝撃な写真は、苦悩と恍惚を一生バタイユの心に痕跡を残した<sup>30)</sup>。

また、小説『眼球譚』（1928、1947）において、登場人物の一人の少女マルセルは、血まみれになってフリギア帽（フランス革命時に愛用された赤い縁なし帽子）をかぶった主人公の「私」を見て、「枢機卿＝ギロチン係りのお坊さん」と思い込んで、衣装だんすのなかで首をつって死んでしまう。

「枢機卿ってだれのこと？」とシモーヌが尋ねました。

「あたしを衣装だんすに閉じこめた人よ」とマルセルは答えます。

「なぜ枢機卿だってわかるんだ？」と私は大きな声を出しました。

問髪をいれず答えが返りました。

「だって、ギロチン係りのお坊さんなんですよ」

私が衣装だんすを開けたとき、マルセルが浮かべた恐怖の表情を思い出しました。私はあのとき、パーティーで使う派手な赤のとんがり帽子のフリギア帽を頭に載せていたのです。そのうえ、怪我をした娘の

ひとりと交わったせいで全身に血が付いていました。

というわけで、「枢機卿、すなわちギロチン係のお坊さん」がマルセルの恐怖のなかで、フリギア帽子 (un bonnet phrygien) をかぶり、血にまみれた死刑執行人の姿と混同されてしまったのです。司祭にたいする畏敬の念と恐怖が奇妙にも一致して、この混同を引き起こしたのです (……)<sup>31)</sup>

ジャン＝リュック・ステンメッツは、かつてバルトが分析したように（「眼の隠喩」）『眼球譚』のオブジェが無軌道なメタファーの連鎖をたどるのではなく、しかるべき歴史的・社会的・文化的コードに則り、物語の最後において、所期の目的地に到達することを精緻な解説によって見事に明らかにしている。すなわち、〈衣装だんす＝処刑台〉（その形態の類似から）、〈枢機卿＝処刑台のお坊さん〉（「枢機卿」は最高位の聖職者で処刑を命じる人物であり、「処刑台のお坊さん」は聴解師である）、〈フリギアの帽子〉（フランス革命期に革命家たちがかぶっていた帽子であり、物語のこの時点ではこの帽子をかぶっていた「私」は血まみれの処刑者である。そしてこの帽子の起源である小アジアのフリギア、そこでは古代においては太陽信仰のミトラ教が盛んで処刑儀式が行われていた）、これらのオブジェはそれぞれの連想をたどり、最後には、死んだはずのマルセルの目玉（実際は、スペインで殺されたの神父の目玉）は尿の涙を流し、「私」を見つめるのである。この時の見つめる「私」は、見つめられる客体となって、ギロチンの刃が切り落とそうと待ち構えている首となるのである<sup>32)</sup>。「供儀」と「エロス」の見事な一致がここに読まれる。

さらには、雑誌『ドキュマン』掲載の論考のなかには「批評的辞書 (Dictionnaire critique)」という名称で分類された短いテキストがいくつかあり、「眼」と題された項目のテキストには、次のような記述がある。『ドキュマン』、1929年6月の第4号に発表されたものである<sup>33)</sup>。

実際、眼に関しては魅惑以外の言葉を口にできないと思われるし、動物や人間の体でこれほど魅力的なものには他に存在しない。しかし、極端な魅惑は、おそらく恐怖の限界に存在するのである。

その点に関して、眼を刃と比較することができるだろう。刃の様相もまた、激しい矛盾した反応を引き起こすのだ。『アンダルシアの犬』の作者たちが、映画冒頭のイメージとして、その両存在の血なまぐさい交合を描く決断をしたとき、彼らはまさに以上のことを、恐ろしいほど、そして漠然と感じたはずである。(OCI, p. 187. 傍点強調バタイユ)

このように、一面において、バタイユが希求したファシズム打倒を経由した革命の完遂はギロチンないしは刃という切断のファンタズムと分かちがたく結びついていたのはれっきとした事実である。しかしながら、このようにさまざまところで多様な意味合いを持つ切断をバタイユ個人のファンタズムだけで片付けてしまうには、このファンタズムには個人を超越する要素が多すぎる。

バタイユのファンタズムはまた、歴史的・社会的に形成され、人類に共有されてきたファンタズムでもあると考えるのが自然であろう。ギロチンの公開処刑は最初は恐怖の的であったが徐々に民

衆の人気を博して「見世物」となっていったし<sup>34)</sup>、『アンダルシアの犬』でブニユエルとダリが映像化したように「眼」に対するオブセッションは人間に固有の謎ともいいうる。

「百刻みの刑」の写真、小説『眼球譚』、そして「眼」のテキストの発想は、出発点は個人的な嗜好であるかもしれないが、ジャン＝リュック・ステンメッツの『眼球譚』分析にもあったように、バタイユが語るもの書くものには個人に限定された次元を超えて、他の人々にも訴えかける力を持っている。処刑やギロチンや眼が喚起する両価性に魅力と恐怖を覚えるのはバタイユ個人だけではなく、われわれもまたそうなのである。われわれは誰でも「異質性」や「呪われた部分」を内部に秘めている人間存在なのではないだろうか。同じことは「アセファル」についてもいえる。ファシズムや国家の頭を切り落とさなければならないのであるなら、当然、自分たちが属する「共同体」もまた「無頭」でなければならないはずである。マソン描くところの「無頭人」は、また自分たち自身の姿でもあるのだ。

## 終わりに

宿敵ナチズムやファシズムを打倒する武器が、フランス革命で使われ、恐怖と混乱をまき散らしたギロチンという殺人兵器であったということは、皮肉以外の何物でもない。また、秘密結社の「アセファル」で、バタイユは本気で人身供儀を行おうとしていた<sup>35)</sup>。このような剣呑かつ危険なバタイユの気質と思想に愛想をつかした友人たちは一人またひとりバタイユから離れていく<sup>36)</sup>。第二次世界大戦勃発の際には、バタイユは文字通り孤立することになる。しかしながら、バタイユはこの時の辛く深刻な経験から戦後の彼のライフワークである『無神学大全』や『全般的経済学』の構想を得て、着実に構築していくのである<sup>37)</sup>。

であればこそ、「ファシズムの心理構造」から「アセファル」へ至る過程でバタイユが提起した諸テーマはまださらに検討を要するであろう。なぜ社会や国家の起源には「神話」が必要であり、それが「儀式」や「犠牲」をとまなうようになっていったのか。特にナチスは「ゲルマン神話や男性結社」にこだわり続けた。そこに「供儀／犠牲 (sacrifice)」が深く根付いているとするなら、「聖なるもの」はそこではどのような機能を果たすのか。「聖なるもの」を20世紀の現代社会に復帰させようとしたファシズムやバタイユの理由や必然性はなんであったのか、等々。われわれの考察すべき課題は多く残されているが、それらについては、稿を改めて論じることとしたい。

## 註

\* 本稿のタイトル「無頭の共和国」は、本稿でも参照した以下の著作のタイトルを借用したものである。

Jesse GOLDHAMMER, *The Headless Republic — Sacrificial Violence in Modern French Thought* —, Ithaca and London, Cornell University Press, 2005.

この著作は、社会や国家設立の起源における政治と宗教との関係、すなわち「暴力／権力」と「犠牲／供儀 (sacrifice)」(そして「聖なるもの」)との問題を主要テーマとして扱っている。そしてゴールドハマーは「犠牲／供儀」の範例を、1789年のフランス革命における恐怖政治、ギロチンによる王の斬首に見ており、それが、

現代社会においても政治権力や政治思想において伝統として引き継がれていることを分析している。この著作で取り上げられているのは、ジョゼフ・ド・メストル、ジョルジュ・ソレル、そしてジョルジュ・パタイユの三名の思想家である。

\*本稿でのジョルジュ・パタイユのテキストは、断りのない限り、以下のガリマール版を使用し、引用文の後に(OCI, p. 12)のように、巻数とページ数のみを付した。

Georges BATAILLE, *Œuvres complètes*, tome I–XII, Gallimard, 1979–1988.

また、パタイユの生涯については、ミシェル・シュリヤ『G・パタイユ伝』(上・下) 西谷修・中沢信一・川竹英克訳、河出書房新社、1991 [Michel SURYA, *Georges Bataille, La Mort à l'œuvre*, Gallimard, coll. 《Tel》, 2021] を参照した。

なお本稿では、フランス語文献からの引用は、邦訳のあるものについては、基本的に既訳を使わせていただいたが、文脈によっては、訳文に変更を加えたところもある。

- 1) この事件については、次の論文が詳しい。平瀬徹也「二月六日パリ騒擾事件覚書」、『史論』、1982、pp. 98–123。また、フランスの1930年代の研究書として、以下のものがある。出版年代が少し古く、最新の研究成果は望むべくないが、それでも30年代当時のフランスの文学、思想、社会、経済を一冊の著作のなかでまとめて総括的に検討したという点において、極めて優れた一冊である。『ヨーロッパ——1930年代』(京都大学人文科学研究書報告)河野健二編、岩波書店、1980。

そして、パタイユとこの事件の関連については、次の論文を参照のこと。濱野耕一郎「二月六日事件とパタイユ」、『水声通信 特集 ジョルジュ・パタイユ』n°30、水声社、2009、pp. 120–131。

- 2) 2月6日の騒擾事件、さらには戦間期において、そもそもフランスにはファシズムは存在していたのか否かという、この領域の門外漢の筆者にとっては驚くべき論争が歴史学者たちのあいだで交わされている。フランスにはナショナリズムや極右はあったが、1789年の革命以来「自由・平等・友愛」の国、共和制をいち早く敷いた国、議会民主主義を基幹とする自由主義を是とする国であるために、それに反対する勢力は厳密な意味におけるファシズムとは別物であるとする「フランス免疫説」なる説があり、これに与する歴史研究者は、概してフランス人研究者に多いようである。ルネ・レモン (René RAYMOND) を筆頭にして、その門下の学者たちミシェル・ヴィノック (Michel WINOCK)、セルジュ・ベルステン (Serge BERSTEIN) がこの説の支持者である。だが、歴史的観点からしてファシズムの起源はフランスにあったとして、その意見に真っ向から反論したのが、『右翼でも左翼でもなく——フランスのファシズム・イデオロギー (*Ni Droite ni gauche L'idéologie fasciste en France*)』を発表したイスラエルの歴史学者ゼーフ・ステルネル (Zeef STERNHELL) で、英米系の歴史家がこちらの後者に属するようである。さらにはこの問題を発展させて、2月6日のデモが自然発生的に起こったものであるという説、あるいは「フランスのファシストたち」によってあらかじめ企まれていた陰謀であったという説にまで分かれて論争が繰り広げられている。

2月6日の暴動事件については、議会調査委員会の資料をもとに書かれたベルステンの次の著作がある。Serge BERSTEIN, *Le 6 Février*, Gallimard / Julliard, 1975。後者の陰謀説に与する最近の研究書としては、以下の著作がある。Brian JENKINS et Chris MILINGTON, *Le Fascisme français Le 6 février 1934 et le déclin de la république*, Éditions Critiques, 2020 (*France and Fascism. February 1934 and the dynamics of political crisis*, Routledge, 2015)。この「フランス・ファシズム」論の論争については、次の著作に収められている序論において、詳しく解説されている。深澤民司「序章 フランス・ファシズム論の展開と本書の課題」、『フランスにおけるファシズムの形成——ブーランジスムからフェソーまで』、岩波書店、1999、pp. 1–53。

なお、この事件を受けてレオン・ブルム率いる「人民戦線」内閣が結成されたのは、この直後の1936年である。Cf. 渡辺和行『フランス人民戦線 反ファシズム・反恐慌・文化革命』、人文書院、2013。

- 3) Louis ALTUSSER, *Des rêves d'angoisse sans fin Récits de rêves (1941–1967) suivi de Un Meurtre à Deux (1985)*, Grasset/IMEC, 2015, p. 39. [ルイ・アルチュセール『終わりなき不安夢 夢話1941–1967』市田良彦訳、書肆心水、2016、p. 60]。
- 4) 上記の訳者である市田良彦の注釈から(同上)。また、次の著作も参照のこと。ヤン・ムーリエ・ブータン『アルチュセール伝 思想の形成(1918–1956)』今村仁司・塚原史・谷昌親・下澤和義・吉本素子訳、筑摩書房、1998。
- 5) 「シャトー街の集会」については、以下の著作を参考にした。

田淵晉也『「シュルレアリスム運動体」系の成立と理論 「離合集散」の論理』、勁草書房、1994、pp. 236–267。Maurice NADEAU, *Histoire du surréalisme*, Seuil, coll. 《Points》, 1991, pp. 119–123。Gérard DUROZOI, *Histoire du mouvement surréaliste*, Hazan, 2004, pp. 182–183。Mark POLIZZOTTI, *André Breton*, Gallimard, coll. 《Biographies》, 1999, pp. 357–364。谷昌親『ロジェ・ジルベール＝ルコント 虚無へ向かう風』(シュルレアリスムの25時)、水声社、2010、pp. 149–156。谷口亜沙子『ルネ・ドーマル 根源的な体験』(シュルレアリスムの25時)、水声社、2019、pp. 85–88。

この「集会」の全体の記録は、このあと報告書としてまとめられ、1929年6月に発行されたベルギーの雑誌『ヴァリエテ (*Variétés*)』の「1929年のシュルレアリスム」特集号に、「続く——革命的傾向を持つ若干の知識人たちに関する資料へのささやかな貢献 (A Suivre : petite contribution au dossier de certains intellectuels à tendances révolutionnaires)」と題されて掲載された。現在は、他に、ガリマール版のアンドレ・ブルトン全集第一巻 (*André BRETON, Œuvres complètes I*, Gallimard, coll. 《Bibliothèque de la Pléiade》, 1988, pp. 951–991)、そして次の著作で読むことができる。 *Procès surréalistes, Textes réunis et présentés par Monique SEBBAG, Jean Michel Place*, 2005, pp. 65–114。

田淵晉也氏によれば、このアンケート内容の「共同的活動」への呼びかけには、以下のような背景がある。もともとシュルレアリストたちの拠点はもっぱら、雑誌『シュルレアリスム革命 (*La Révolution surréaliste*)』での「共同的活動」が主であったが、この時期になるとメンバー間の軋轢や対立が表面化し(スーポーやアルトーといった主要メンバーの除名処分)、シュルレアリストたちの「個人的活動」が目立つようになる。というより、皮肉なことに個人的活動が活発になったために、『シュルレアリスム革命』での共同的活動がおろそかになってきたといった方がいいだろう(1927年にはデスノスの『自由か愛か』、クルヴェル『理性に反抗する精神』が、1928年にはブルトンの『ナジャ』と『シュルレアリスムと絵画』、アラゴンの『文体論』、ペレの『大いなる賭』が出版されている)。またこの頃には、芸術・文学活動だけでなく政治的活動も活発になり、政治活動を好まない初期メンバーの脱退(スーポー、アルトー、デスノス)があったり、1926年には左翼的雑誌『クラルテ』と『シュルレアリスム革命』を一体化させて『内乱 (*La Guerre civile*)』という雑誌のもとに活動を共にしようという計画があったが、挫折している。加えて、グループを離れた元メンバーが、この集会の直後、ジョルジュ・バタイユを中心とする雑誌『ドキュマン (*Documents*)』に集結して、互いに争うという対立構図が生まれつつあった。こういったいざこざや活動の停滞に終止符を打つために、当初は、シュルレアリスムに近い位置にあった若い世代の『大いなる賭』グループのメンバーを取り込むという目論見がこの集会にはあったのである。(以上の詳細は、田淵晉也、前掲書、pp. 236–239と巻末掲載の(資料1)にまとめられている)

- 6) この二つめの声明を書いた首謀者が、後に17世紀文学研究の著書『偉大な世紀のモラル』(*Morales du Grand siècle*, 1948)、大著『フランス・ロマン主義』(*Romatismes français*)等をものしたポール・ベニシュー (Paul BÉNICHOU, 1908–2001)である。シャトー街の集会とベニシューとの関係については、片岡大右「ポール・ベニシューとその時代(1)」(ポール・ベニシュー『作家の聖別 1750–1830 近代フランスにおける世俗の精神的権力到来をめぐる詩論』片岡大右・原大地・辻慶子・古城毅訳、水声社、2015、pp. 657–680)を参照した。ポール・ベニシューは、1934年3月の『社会批評』の最終号(第11号)に20ページ以上にもわたる論文「フラ

- ンスにおける思想史と社会的モラルの基礎 (L'histoire des idées en France et les fondements d'une morale sociale)」を寄稿している (同号のベニシュの論考の直前に、バタイユの「ファシズムの心理構造」の第二部が掲載されている)。Cf. *La Critique social*, Éditions la Différence, 1983 (réimpression), pp. 212-224.
- 7) ドリュ・ラ・ロシュルの生涯と作品、その思想とコラボになったいきさつは、次の研究書が詳しい。有田英也『政治的ロマン主義の運命——ドリュ・ラ・ロシュルとフランス・ファシズム』、名古屋大学出版会、2003。また、フランスの反近代主義者とコラボの思想家や作家を詳細に論じた次の著作は欠かせないだろう。福田和也『奇妙な廃墟』、ちくま学芸文庫、2002。
  - 8) Drieu la Rochelle, *Romains, Récits, Nouvelles*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 2012, p. 1246 [ドリュ・ラ・ロシュル『ジル』(下)若林真訳、国書刊行会、昭和62年、pp. 226-227。引用文はこの翻訳を使用させていただいた]。
  - 9) *Ibid.*, p.1247 [同上、p. 227]。
  - 10) Robert BRASILLACH, *Œuvres complètes VI*, Au Club de l'honnête Homme, 1964, pp. 151-152 [ロベール・ブラジャック『われらの戦前・フレーヌ獄中の手記』高井道夫訳、国書刊行会、平成11年、pp. 106-107。なお本文での引用の日本語は、この邦訳を使用させていただいた。ただし、この翻訳自体、かなり補足説明的な訳であるので、一部訳文を変更した箇所がある。下の註12)についても同様である]。
  - 11) 福田和也はこう言っている。「一九三四年二月六日の暴動事件は、ドリュ・ラ・ロシュルにとってはいわば戦後の漂泊の帰結であったのに対して、ブラジャックの世代にとっては政治的経歴の端緒にあたるものだった。」(前掲書、p. 358) 言い換えると、ドリュ・ラ・ロシュルにとっては、自らのデカダンス的生活を清算し、新規まき直しをする絶好の機会であったのに対して、ブラジャックにとってはその独特な政治的シニシズムを発揮する絶好のチャンスであったのだといえるだろう。
  - 12) BRASILLACH, *op.cit.*, p. 154 [ブラジャック、前掲書、pp. 108-109]。
  - 13) Emmanuel BERL, *La Fin de la III<sup>e</sup> République*, Gallimard, coll. «Folio / Histoire», 2013.
  - 14) 雑誌『社会批評』(1931-1934)と創刊者兼編集長のボリス・スヴァーリン (Boris SOUVARINE, 1895-1984) についても書いておこう。スヴァーリンは、フランス共産党創設者の一人であり、モスクワのコミンテルンの幹部でもあったが、1924年からスターリン批判を開始し、フランス共産党から除名されている。その後、「民主共産主義サークル (Le Cercle communiste démocratique)」を結成し、そこにバタイユ、ミシェル・レリスやレーモン・クノーといった元シュルレアリストたちも参加している。シモーヌ・ヴェイユ (Simone WEIL, 1909-1943) も雑誌寄稿者の一人であった。雑誌『社会批評』の主な出資者は、ロール (Laure) ことコレット・ペニョー (Colette PEIGNOT, 1903-1938) という女性であり、最初スヴァーリンの愛人であったが、その後、バタイユのもとに走り、バタイユに看取られて亡くなる。そのため、後年『社会批評』誌のリプリント版が出版されたとき、その「序文 (Prologue)」において、スヴァーリンはバタイユを回想して悪しざまに書いている。Cf. *La Critique social*, *op. cit.*, pp. 7-26 [部分訳ではあるが、この「序文」の邦訳がある。ボリス・スヴァーリン「ファシズムに魅された男」岩野卓司訳、『ユリイカ 特集 ジョルジュ・バタイユ』、青土社、1986、pp. 93-111]。また、以下も参照のこと *Boris Souvarine et la critique sociale*, sous la direction d'Anne Roche, Éditions la découverte, 1990。『水声通信 特集 『社会批評』のジョルジュ・バタイユ』、水声社、n°34, 2011。
  - 15) 「ファシズムの心理構造」については、次の先行研究を参照した。吉田裕「バタイユ・ポリティック」、『ジョルジュ・バタイユ 異質学の試み——バタイユ・マテリアリスト I』、書誌山田、2001、pp. 85-190。市川崇「異質なものとその運命：ジョルジュ・バタイユの『ファシズムの心理構造』に見る「異質性」の概念の起源とその射程について」、『藝文研究』Vol. 89, 慶應義塾大学藝文学会、2005、pp. 142-169。石川学『ジョルジュ・バタイユ 行動の論理と文学』、東京大学出版会、2018、pp. 39-49。佐々木雄大『バタイユ エコノミーと贈与』、講談選書メチエ、2021、特に第二章「エコノミー論の軌跡」(pp. 59-133)。

以下、「ファシズムの心理構造」と「フランスのファシズム」の日本語訳は、次の著作の訳文を使用し、必

要に応じて、表記等を変えたところがある。ジョルジュ・バタイユ『物質の政治学 バタイユ・マテリアリストⅡ』吉田裕訳、書肆山田、2001、pp. 13-71 および pp. 72-87。

- 16) バタイユは「社会の中の異質的存在」という節において(OCI, pp. 344-349)、エコノミー中心の同質的社会が同化できない分子として、群衆、戦士、貴族、貧窮者の階級、狂人、指導者、詩人をあげている。これらの分子が共通して体现しているのは、「暴力、過度なもの、錯乱、狂気」(OCI, p. 347)であるが、それに加えて、非生産的な廃棄物や排泄物、「無意識」、そして社会宗教学で言うところのマナやタブーといった「聖なるもの (le sacré)」もそれにあたる。特に最後の「聖なるもの」については、バタイユは、デュルケムが「聖なるものを社会的なものと同視」(OCI, p. 346)したが、この定義は科学的に基づいていたために「異質なもの」を「同質なもの」から分けるまでに至らなかったとデュルケムの方法論を批判している。それは、異質なもの、ひいては聖なるものの持つ二重性(例えば「浄と不浄」)にかかわる問題にもつながるのだが、この聖なるものの両義性については、デュルケムもその認識を持ち合わせていたのであるから、この複雑な問題には、ここではこれ以上触れることはしない。例えばデュルケムの次の著作の第5章「償いの儀式と聖概念の両義性」を参照のこと(デュルケム『宗教生活の基本形態』(下)山崎亮訳、ちくま学芸文庫、pp. 330-382)。
- 17) バタイユは「ファシズムの心理構造」を書くにあたって、当時の新しい学問、社会学、ドイツ哲学(現象学)、精神分析の知見を利用していると書いているが(OCI, p. 339)、その中でも内容から見て、特に依拠しているのは、以下の二つの著作である。すなわち、デュルケム『宗教生活の基本形態』(1912)とフロイト『集団心理学と自我の分析』(1921)である。なお、バタイユとデュルケムとを直接比較し、バタイユを社会学的見地から論じた数少ない著作のひとつとして、以下を参照のこと。岡崎宏樹『バタイユからの社会学 至高性、交流、剥き出しの生』、関西大学出版会、2020。
- 18) カントの「定言命法」はフランス語では、《impératif catégorique》であり、それに付与されている実詞と同じものである。要するに、《impératif》とは、「為すべし」という意味である。
- 19) 「集合的沸騰」、『社会学の基本 デュルケムの論点』(デュルケム/デュルケム学派研究会著)、学文社、2021、p. 119。そして、佐々木雄大、前掲書、pp. 61-65を参照のこと。
- 20) 「革命」ということで、バタイユはそれが非合理的で「異質なもの」の実現とみていたが、革命を合理的なものの実現であるとみるシモース・ヴェイユと真っ向から対立していたという。
- 21) 以下、「コントロール・アタック」の日本語訳も、次の著作の訳文を使用し、必要に応じて、表記等を変えたところがある。ジョルジュ・バタイユ『物質の政治学 バタイユ・マテリアリストⅡ』吉田裕訳、前掲書、pp. 115-225。なおバタイユ全集版以外でも、次の単行本に一冊にまとめられている。Georges Bataille André Breton, 《CONTRE-ATTAQUE》 *Union de lutte des intellectuels révolutionnaires*, Ypsilon Éditeur, 2013.
- 22) Cf. 剣持久木『記憶の中のファシズム 「火の十字架団」とフランス現代史』、講談社、2008。フランソワ・ド・ラ・ロック大佐率いる退役軍人団体であった「火の十字架団」には、「制服」を着こんで凱旋門の前で整然と隊列を組んでいる写真が残されていて、そのイメージからこの団体の「ファシズム神話」が生まれている。ただし、1934年2月6日のデモにおいては、他の右翼の団体と違って、ド・ラ・ロック大佐の指示で途中から戦線を離脱しているため、警官隊との衝突には至らなかった。
- 23) 「共同体」を扱った著作多数存在するが、ここではバタイユの「共同体」を論じている主流の著作だけを掲げておく。Maurice BLANCHOT, *La Communauté inavouable*, Minuit, 1983 [モーリス・ブランショ『明かしえぬ共同体』、西谷修訳、ちくま学芸文庫、1997]。Jean-Luc NANCY, *La Communauté désœuvrée*, Christian Bourgois, 1990 [ジャン＝リュック・ナンシー『無為の共同体 哲学を問ひ直す分有の思想』、西谷修・安原伸一朗訳、以文社、2001] ; *La Communauté désavouée*, Galilée, 2014 [ジャン＝リュック・ナンシー『否認された共同体』、市川崇訳、月曜社、2023]。日本人研究者によるものでは、管見の限りでは、以下の二つの論考が現在、もっとも内容が充実していて深い考察がなされているだろう。岩野卓司「問われる共同体 ナンシーとブラン



- シヨによるバタイユの共同体から出発して」、『バタイユとその友たち』、水声社、2014、pp. 99-124、門間広明「焼け残るものへの眼差し 1940年代のブランシヨはバタイユをいかに読んだか」、同書、pp. 140-164。
- 24) 「二〇〇家族 (200 familles)」とは、「〈第三共和政下のフランスで支配層をなした〉二百家族。(注) フランス銀行の株主総会には、主要な200人の株主しか出席できなかったことに由来する」(『小学館 ロベール仏和大辞典』の《famille》の項、p. 1017)。
- 25) これと若干ニュアンスは異なるが、ブランシヨは占領下のフランスで「ヴィシー政府から補助を受けていた組織を利用してヴィシー政府に反逆する」という「お人よしな計画」を抱いたことを回想している。Cf. Maurice BLANCHOT, *Pour l'amitié*, Fourbis, 1996 [モーリス・ブランシヨ『友愛のために』、清水徹訳、オンデマンド出版《リキエスタ》の会、2001]。
- 26) 以下、『アセファル』の日本語訳は、次の著作の訳文を使用し、必要に応じて、表記等を変えたところがある。ジョルジュ・バタイユ『無頭人』兼子正勝・中沢信一・鈴木創士訳、現代思潮社、1999。この雑誌『アセファル』もリプリント版が出版されている。Acéphale, Jean-Michel Place, 1980。また、「アセファル」に関しては、多くの新発見資料を盛り込んだマリナ・ガレットティの次の研究書は欠かせない。Georges Bataille, *L'Apprenti Sorcier, textes, lettres et documents (1932-1939) rassemblés, présentés et annotés par Marina Galletti*, Éditions de la Différence, 1999 [ジョルジュ・バタイユ (マリナ・ガレットティ編) 『聖なる陰謀 アセファル資料集』、吉田裕・江澤健一郎・神田浩一・古永真一・細貝健司訳、ちくま学芸文庫、2006]。
- 27) 頭を欠いた欠如的存在「アセファル」が示している可能性は、この後にバタイユが主題として展開していく「非-知 (non-savoir)」、人間という欠如的存在、「神話の不在」、そしてこう言ってよければ〈不可能な共同体〉等々という主題につながっていくであろう。
- 28) 市川崇は、その論考で、バタイユのこの「同質性/異質性」という概念装置そのものに問題があり、その矛盾を感じてバタイユはその後、この理論装置を放棄していった指摘している。Cf. 市川崇、前掲論文、p.151-152。また、ブランシヨは、バタイユがこの「ファシズムの心理構造」のなかのあいまいな部分を書いたことを後悔しているという証言を残している。Cf. Maurice BLANCHOT, *Les intellectuels en question Ébauche d'une réflexion*, Fourbis, p. 44 [モーリス・ブランシヨ『問われる知識人 ある省察の覚書』、安原伸一朗訳、月曜社、2002、p. 44]。
- 29) ゴールドハマーもまた、「バタイユの『供儀』についての考察が先駆者たち [メストル、ソレル] を熱狂させたこの出来事、つまりルイ16世の王殺しから最初の発想を得ている」と述べている (Goldhammer, *op.cit.*, p. 155)。
- 30) この処刑される人物に「苦痛」と「歓喜」の両方の表情が読み取れる写真がバタイユに決定的な影響を与えたことについては、バタイユの最後の著作『エロスの涙 (*Les Larmes d'Eros*)』(1961) でこう述べられている。「ここで私が意図しているのは、ある根本的な関係、すなわち、宗教的恍惚とエロティシズム——特に、サディズム——との関係を明らかにすることである。最も打ち明け難いものから、最も高所のものへの関係である。(……) エロティシズムは、その固有の領域に限定されたならば、かの宗教的エロティシズムにおいて示される根本的な真実、すなわち恐怖と宗教的なものとの同一性に接することができなかったであろう。宗教は、総体的には、供儀 (sacrifice) を基盤とした。けれども、ただ果てしない迂回によってのみ、反対物 (les contraires) が明らかに結びついた姿で現れ、われわれの承知したとおり、供儀において示される宗教的恐怖がエロティシズムの深淵に、ただエロティシズムによってのみ輝き出る究極的な嗚咽に結びつく瞬間に接することができるようになったのである。」(Georges BATAILLE, *Les Larmes d'Éros*, nouvelle édition augmentée, Pauvert, 1981, pp. 237-238 [ジョルジュ・バタイユ『エロスの涙』森本和夫訳、ちくま学芸文庫、2001, pp. 311-312]。傍点強調はバタイユ。日本語訳は、上記の訳書を使用させていただいた) このバタイユの文章は、バタイユ最後の著作『エロスの涙』の「結論」の最後の部分である。すなわち、これがバタイユの「エロティシズム」(「宗教」のある側面との抜きがたい一致)、ひいては「反対物」が一致するという相矛

盾する性向を備えて捉えがたい人間なるものの全体性の結論と見てもいいであろう。ところで、問題の写真は、バタイユの同名の著作に再録されている(ただし、ガリマール版のバタイユ全集では割愛されている)。あるいはミシェル・シュリヤの伝記あるいは邦訳でも簡単に見ることができる。

- 31) Georges BATAILLE, *Romans et Récits*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 2004, p. 27 [『マダム・エドワルド 目玉の話』中条省平訳、光文社古典新訳文庫、2006、pp. 87-88、一部訳文変更]。
- 32) Jean-Luc STEINMETZ, 《Le Bonnet de Mithra》, *La Poésie et ses raisons*, José Corti, 1990, pp. 151-167。
- 33) 『ドキュマン』の邦訳には、以下の二冊がある。『ドキュマン』片山正樹訳、二見書房、1974。『ドキュマン』江澤健一郎訳、河出書房文庫、2014(本稿の日本語は、後者の訳文を使用させていただいた)。この『ドキュマン』に関しては、雑誌の復刻版 (*Documents*, 1-2, Jean-Michel Place, 1992) が出版されているほか、現在では数多くの研究書が発表されている。なかでも、「眼」についての「批評的辞書」の項目に関しては、『ドキュマン』からそこだけ抽出して、文字通り「辞書的」に配列し、それぞれの項目をまとめた一冊の著作があり、「眼」の項目に関しては、バタイユ以外にもデスノス、民俗学者・人類学者のマルセル・グリオール (Marcel GRIAULE, 1898-1956)、その他の四編の「眼」に関するテキストをまとめて読むことができる。Cf. *Dictionnaire Critique*, Édition Prairial, 2016, pp. 56-62。
- 34) 「ギロチン」に関しては、以下の文献が参考になる。Daniel ARASSE, *La guillotine et l'imaginaire de la Terreur*, Flammarion, coll. 《Champs》, 2010 [ダニエル・アラス『ギロチンと恐怖の幻想』、野口雄司訳、福武書店、1989。ただし、この翻訳では残念ながら注の部分が全てカットされている]。Daniel GEROULD, *Guillotine Its Legend and Lore*, New York, Blastbooks, 1992 [ダニエル・ジェルールド『ギロチン——死と革命のフォークロア』金澤智訳、青弓社、1997]。
- 35) この人身御供については、参加者の多くの証言(というより証言拒否)があるようだが、シュリヤの伝記を参照されたい。Michel SURYA, *op.cit.*, p. 286-292。[ミシェル・シュリヤ、前掲書(下)、pp. 31-37]。
- 36) Cf. OCV, p. 514。こうしてバタイユは、自分を「使い道のない否定性 (la négativité sans emploi)」と呼ぶことになる。もっともこれは、元来、哲学的意味として使われた言葉であるが、この時期の彼の個人的状況をあらわすのに適した表現である。
- 37) ジュリア・クリステヴァはこう書いている。「内的経験が斬首を必要とする実体的変化であり、そこに虚無の炎が姿を現すための、意識の横断であること——このことを誰よりも多くのリスクを引き受けながら示したのは、ジョルジュ・バタイユにほかならない。経済的合理性を死の欲望の恐怖に結び合わせるファシズムと闘うために、彼が人間的なるものの横断的価値付けに訴えるとき、彼の脱自=恍惚を定着するのは〈無頭人 (アセファル)〉の形象である。」(Julia KRISTEVA, *Visions capitales*, Edition de la Réunion des musées nationaux, 1998, p. 150 [ジュリア・クリステヴァ『斬首の光景』、星埜守之・塚本正則訳、みすず書房、2005、p. 236]。

\*本稿は、2023年11月4日に山形大学主催で実施された「日本フランス語フランス文学会 2023年度北海道・東北支部大会」でのシンポジウム「両大戦あいだの文学政治、そしてその後」において、口頭発表した報告「1930年代、コンコルド広場のジョルジュ・バタイユ」に大幅に加筆修正を加えたものである。同シンポジウムで発表された、翠川博之先生(東北学院大学)、門間広明先生(北海学園大学)、竹内修一先生(北海道大学)、そしてなによりもこのシンポジウムを挟んでフランスでの研究発表をかかえお忙しい中、超人的なすご技を發揮され、シンポジウムの発案から連絡やとりまとめまでを見事にこなし、当日の司会を務められた山形大学の合田陽祐先生に感謝の念を申し上げます。また、会場で聴講され、貴重なご意見とご批判をいただいた皆様にもお礼を述べます。